

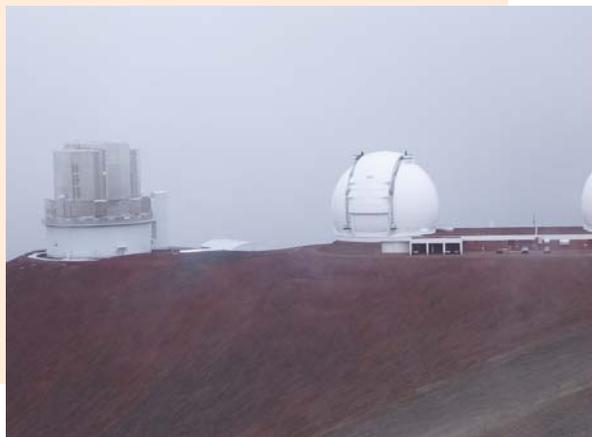
第1部

日系アメリカ人の歩みをたどる

コラム：国立天文台ハワイ観測所

ハワイに日本の天文台があることをご存知でしょうか。それはハワイ島のマウナケア山頂に建設された国立天文台ハワイ観測所です。ハワイ観測所では、1999年から観測が始まりました。マウナケア山はハワイ諸島の最高峰で、標高4139mです。山頂は晴天の夜が年間240日もあり、天体観測を妨げる人工的な光の影響をほとんど受けないために天体観測にとって最適な場所です。ハワイ観測所には「すばる望遠鏡」と呼ばれる口径8.3mの世界最大級の鏡を備えた光学赤外線望遠鏡が設置されていることでも有名です。山麓から山頂までは道路が整備されており、一般観光客でも自動車で簡単に登ることができます。しかし、山頂の気圧は地上の3分の2しかなく、夜間の年平均気温は0度です。私たちが訪れた8月でも、セーターの上に防寒着が必要でした。山頂では、観測所内の階段を昇り降りするだけでめまいを体験しました。この過酷な自然環境の中、多くの日本人研究者が研究と観測に携わっています。また、ここでは日本を含む11カ国の観測所が集まる国際的研究施設を形成しています。マウナケア山頂はハワイと同じ多民族社会であり、そこの日本人研究者は「新日系人」と呼べる存在かもしれません。

(田尻信壹)



左側の建物が国立天文台ハワイ観測所
(ハワイ島, 2006年8月)

アメリカに生きる日系人の歩み

□はじめに

最初にアメリカに渡った日本人はどんな人？

現在、アメリカには多くの日系人が暮らしています。日系人は見た目では日本人と見分けのつかない人も多くいますが、三世（移民した人から数えて第三世代目の人）や四世になると日本語を話す人はほとんどいません。また、意識の上でもアメリカに生きるアメリカ人なのです。それでは、いったいアメリカに暮らす日系人はどれくらいいるのでしょうか。

2000年の国勢調査によると、アメリカに住む日系人人口は79万5051人で、そのほとんどがハワイ州と本土の西海岸（カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州）に暮らしています。アメリカに住むアジア系集団の中で、日系人は1970年代までは最大の集団でしたが、近年、アジア各国からの新しい移民が増え、現在では、中国系、フィリピン系、ベトナム系、韓国系につぐ、第五番目の集団になっています。

では、最初にアメリカに渡った日本人は誰だったのでしょか。1841年、土佐の鯨船が漂流し5名の日本人がアメリカの捕鯨船ジョン・ホランド号によって救助され、ホノルルに入港しました。その後、1名がジョン・ホランド号とともにアメリカに渡りました。この人物が後にジョン・万次郎と呼ばれた中浜万次郎でした。また、1850年には、「永力丸」が遠州沖で漂流し、アメリカ船に救助され、乗船していた浜田彦蔵ら17名はアメリカへ渡りました。彦蔵はアメリカのボルチモアで市民権を得て、ジョセフ・ヒコと名乗りました。ここに日系アメリカ人第1号が誕生したのです。

日本からアメリカへの移民（他国

に移って住むこと、またその人）は、1868年（明治元年）、出稼ぎ移民が砂糖きびプランテーション労働者としてハワイに到着したのが最初でした。その後、1924年の「排日移民法」によって日本からの移民が完全に停止されるまでの間に、多くの日本人移民がハワイやアメリカ本土に渡りました。今日、アメリカに住む日系人の大半がその子孫なのです。

アメリカへの移民が始まってから現在までの間に、日系人は様々な経験をしてきました。アメリカにおける日系人の歴史を、「移民初期」（1841年～1899年）、「移民と排日運動期」（1900年～1936年）、「太平洋戦争と強制収容期」（1937年～1945年）、「戦後復興期」（1946年～1965年）、「補償運動期」（1966年～）の五つの時期にわけてみましょう。

□移民初期（1841年～1899年）

ハワイに日系人が多いのはなぜ？

1868年、日本人最初の海外移住者約150人が砂糖きびプランテーションの労働者としてハワイに渡りました。1868年がちょうど明治元年にあたることから彼らは「元年者」



他の島に渡る船を待つ移民（ブライアン、1899）



(がねんもの)と呼ばれました。アメリカ本土への移民は翌年1869年、オランダ人エドワード・シュネルに率いられて渡米した会津藩の一団が最初でした。彼らは悲劇の会津戦争後、アメリカ大陸に新天地を夢見た会津藩の落人だったのです。

1881年には、ハワイ国王カラカウアが来日して、中国人に代わる労働力を求めて日本人移民誘致を日本政府と交渉しました。それによって1885年には政府間の契約による「官約移民」¹⁾ 1930人がハワイに渡りました。その後、1894年にハワイ官約移民制度が廃止されるまでに、26船で約2万9千人がハワイへ渡りました。その後は民間の移民会社が移民を斡旋するようになり、広島、山口、沖縄、熊本などから多くの人々がハワイやアメリカ本土へ渡りました。

ハワイの砂糖きびプランテーションでは、マネージャーはいつもヨーロッパ人でした。労働監督はポルトガル人やスペイン人で、日本人は皆、汗みどろになって働く肉体労働者でした。当時、ある日本人新聞記者は、その状況を「アメリカの南部の白人と黒人奴隷の主従関係に似ている」と書いています。プランテーションでは中国、フィリピン、韓国などの各国からの移民も働いており、それらの文化が接触し、ハワイ先住民の文化も取り込

1) 「官約移民」(かんやくいみん)

官約移民とは、日本の明治政府とハワイ王朝の間に締結された「日布渡航条約」にもとづいて1886年から1894年までにハワイへ渡航した日本人契約移民のことをいいます。

1880年代、日本は不況のどん底にあえいでいました。商業の不振、失業、重税、凶作に見舞われました。明治政府は農村の不況の対策として移民募集を積極的に行ったのです。1891年ごろから、民間の移民会社ができはじめ、政府は移民の取扱をすべて移民会社にまかせました。

んで新しい文化が生まれました。

1880年代後半には、アメリカの高賃金に魅せられてカリフォルニアへ移民する日本人が増え、ハワイから本土に渡るものも現われ、1895年にはアメリカ本土に暮らす日本人は6,000人に達しました。ハワイやカリフォルニアでは日本人移民によって日本語の新聞や雑誌も刊行されるようになり、日系人の定住が進みました。

2) 移民と排日運動期(1900年～1936年)

なぜアメリカへの日本人移民が禁止されたのでしょうか？

当時の日系人移民は、いつかはお金をたくさんためて日本へ帰ることを夢見ていたため、低賃金でも懸命に働きました。しかし、アメリカ本土ではあまりにも短い期間に日本



多様な国からの移民が働いていたプランテーションで生まれたミックスプレートには各国の料理が盛られる。(マウイ島, 2006年8月)

人移民が殺到したため、仕事を奪われることを心配したアメリカ人による日本人排斥の動きが強まりました。そのため、日本人移民はかつて中国人移民が経験したようなひどい人種差別と戦わなければなりません。日本人は法律で「帰化不能外国人」と規定され、結局1952年までアメリカに帰化することができませんでした。

1900年、日本政府はアメリカへの移民を一時禁止しましたが、日本人移民に対する排斥気運が高まり、サンフランシスコでは市民大会で日本人労働者排斥が決議され、その後もますます日本人への排斥運動が激しくなりました。1906年、サンフランシスコ教育委員会では東洋人学童排斥命令が出され、日系人児童は隔離された東洋人学校へ通うことを強制されました。1907年の「紳士協定」をうけて、日本政府は1908年からアメリカへの日本人移民を制限しました。

アメリカ本土在住の一世の多くは、1910年頃までに何らかの形で農業に携わるようになり、その大部分がカリフォルニア州に集まっていました。彼らは農民として定住するにつれ、日本人農業組合を組織するなど、様々な形で連携することで、アメリカ西部の農業開発に大きな貢献をしました。しかし、日系移民の農業の発展とともに、白人の反日感情も高まってきました。



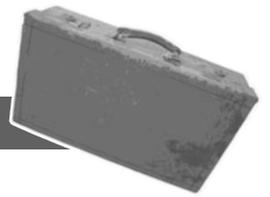
入国審査の順番を待つ「写真花嫁」たち



港につき夫を探す「写真花嫁」
(ハワイプランテーションビレッジ, 2006年8月)

さらに、1913年にはカリフォルニア州を初めとし、その後数年してワシントン州やオレゴン州など九つの州で、実質的に日系人の土地所有を禁止する「外国人土地法」が成立し、日本人移民たちはアメリカ生まれの二世の子ども（アメリカ国籍）の名義で土地を所有しなければならなくなりました。当時アメリカでは、異人種間の結婚は法律で認められていなかったため、日本に帰って結婚相手を見つけるだけの資金がない男性は、日本にいる親戚を通して写真を交換することで結婚相手を見つけました。これが「写真花嫁」と呼ばれるシステムで、「写真花嫁」の渡米を日本政府が禁止するまで、1900年代後半から1920年の間に多くの「写真花嫁」が渡米し、結婚して家庭を築き、それにより日系コミュニティの発展が促されたのです。やがてアメリカ生まれの二世が増えるとコミュニティも大きくなり、さまざまな社会活動を提供するようになり、二世に日本語と日本文化を教えるため、日本語学校も作られました。子どもたちは放課後、様々なクラブ活動やスポーツを楽しんで、毎日を過ごしたのです。

日系人は移民初期より、様々な人種差別に直面しましたが、1920年代に入り、排日運動の高まりの中で、ついに1924年、「排日移民法」¹⁾が成立し、日本からの移住が完全に禁止されました。こうした動きに対応して日系人は県人会や各組織をつくりました。



1930年には、その後日系人社会をまとめていくのに重要な役割を果たし、現在も日系社会に影響のある日系アメリカ人市民協会（Japanese American Citizens League）が組織されました。

1920年代後半から1930年代にかけ、二世の人口はどんどん増加し、やがて日系人コミュニティの大多数を占めるようになりました。1940年頃には、二世の大部分はまだ高校生以下でしたが、その数はすでに日系アメリカ人総人口の63%にまで達していました。

二世はアメリカの大衆文化の影響を強く受けて成長しました。公立学校に通い、クラスメイトと同様に英語の本や雑誌を読み、ハリウッド映画やラジオ放送を楽しんだのです。しかしその一方、彼等は一世の両親や日本語学校の教師から日本的な道徳心や文化も学びました。このような二重の文化的影響を受けて、二世はアメリカ人となっていたのです。

□第二次世界大戦と強制収容期 （1937年～1945年）

第二次世界大戦中、日系アメリカ人はどのような生活を送ったのでしょうか？

昭和に入り、日本は戦争への道をつきすすみました。1931年、満州事変がおき、1937年には日中戦争が始まりました。世界では1939年から第二次世界大戦が始まり、アメリカの対日感情は悪化の一途をたどり、アメリカで暮らす日系人の立場はさらに悪いものになりました。

第二次世界大戦期は日系人にとって最もつらい時期でした。1941年12月7日（日本時間8日）、日本軍による真珠湾攻撃が行われた直後、日本軍に味方しているのではないかという疑いによって在米日系人指導者1291人が拘束され、736人が危険人物であるとしてFBIに逮捕されました。厳しい尋問の後、彼

☞ 「排日移民法」

外国移民の流入が激しくなると、移民の入国を制限することを主張する人々が勢力を増しました。1924年、移民を制限することを目的とした新移民法が制定されました。新移民法は日系人に大きな影響を与えました。日本からの新移住者は特例を除いて禁止され、帰国して妻をむかえて再渡米することも禁止されました。新移民法は日本人移民を禁じることを目的としていたので「排日移民法」と呼ばれたのです。

☞ 「大統領行政命令9066号」

1942年2月19日、ルーズベルト大統領は行政命令9066号に署名し、「一部、またはすべての住民を、立ち退かせることができる軍事地域を指定する権限」を陸軍省に与えました。この命令により陸軍省は太平洋岸をこのような軍事地域と決めました。そして日系人は夜8時以降、外出してはいけない、また、自宅から8キロメートル以上遠くへ言ってはいけない、と命令したのです。

☞ 「敵性外国人」

戦争をしている相手国の国民やその国の出身者のこと示します。すでに国籍がある場合、外国人ではないはずですが、アメリカ国籍をもっていた二世に対しても「敵性外国人」として扱いました。敵国であったドイツ系やイタリア系の人々は敵性外国人とはされず、強制収容もされませんでした。当時日系人への人種的差別や偏見があったことがわかります。

らの多くは留置場に長期間拘束されたのです。

翌1942年2月19日、ルーズベルト大統領は、「大統領行政命令9066号」☞に署名し、それによってアメリカ西海岸に居住していた約12万人の日系人（その60%はアメリカの国籍を有していた）は、スパイ行為や破壊行為の事実がないにもかかわらず「軍事上の必要性」という名目の下、強制立ち退き・収容を余儀なくされたのです。アメリカ生まれの日系人も外国生まれの日系人も同様に、

アメリカ国内10箇所に点在した強制収容所に収容されました。しかし、同じ「敵性外国人」¹⁵⁸であったドイツ系やイタリア系に対しては、強制収容は行われなかったのです。

収容所は砂漠地帯などの住環境には適さない地域に作られ、有刺鉄線に囲まれた敷地内にバラックが建てられ、6メートル四方の一部屋に一家族が暮らしました。部屋には水道もなく、共同の洗面所と洗濯場に行かなければなりません。日系人は収容所での生活¹⁵⁹をよくするために、施設設備を改善し、学校や娯楽施設を作るなど、様々な努力や工夫をしました。しかし、収容所内コミュニティの生活は、いつもプライバシーがなく、長い列と狭苦しい生活空間、混雑した食堂と浴場など、いつも混乱をきたしていました。男性と女性が別れて食事をしたり、子どもは子どもだけで集まって活動したりする間に、日系人家庭内での親の権限も次第に弱まってきました。

戦時中に全米を被った反日ヒステリーのの中で、「民主主義」「自由」「平等」というアメリカの理想は無視され、合衆国憲法も日系人の権利と自由を守ることができませんでした。合衆国本土では、日系人の強制収容が進められましたが、ハワイの状況は異なっていました。ハワイ全人口の40%近くを占め



強制収容に送られる家族
(ハイワード, 1941年)

ている日系人を強制的に隔離するのは、それが地元の経済に与える影響の大きさを考えると、現実的には不可能なことでした。そのかわり政府は厳戒令を発し、随時「危険」と思われる日系人を逮捕していきました。

このように自らの合衆国への忠誠心を疑問

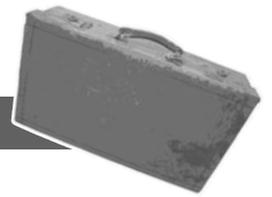
視された日系人ですが、アメリカの戦争遂行に協力し、積極的に従軍するものもいました。合計1万人のハワイ二世がアメリカ陸軍第100部隊(二世部隊)所属の兵士となり、やがて彼らを中心に本土の二世兵士が加わって第442連隊戦闘部隊¹⁶⁰が編成されました。この第442連隊戦闘部隊が示した日系人のアメリカへの忠誠心とヨーロッパ戦線での活躍が、その後の戦後補償運動に重要な意味を持つことにもなったのです。

多くの日系人がこのように従軍志願することや強制収容政策にしたがうことで忠誠を示そうとしたのに対し、別の形で愛国心を示そうとした日系人もいました。4人の二世は西海岸からの退去命令などの違憲性を裁判で問うという道を選び、彼らは合衆国最高裁判所にいたるまで政府と争い続けたのです。1944年、日系アメリカ人の徴兵が再開されると、反対し投獄されるものもいました。しかし、彼らの主張は、「憲法によって保証されたアメリカ市民としての権利を政府が認めれば進んで徴兵に応じる」というものでした。

□戦後復興期(1946年～1965年)

戦争が終わって日系人はどのような問題に直面したのでしょうか？

第二次大戦の終結とともに、収容所が閉鎖され日系人は西海岸に戻り、家屋破壊や周囲の敵意に直面しながらも生活の立て直しをはかりました。しかし、日系人にとって戦時中の強制立ち退きによる経済的損害もさることながら、精神的な打撃も大きかったのです。戦後長い間、ほとんどの二世は強制収容の経験を恥ずべきことと考え、それについて沈黙を守り、白人社会への同化を進め、白人と同じようにふるまい、行動しようとしました。それは彼らのエスニック・アイデンティティ(日系人としての意識)のみならず、三世の



子育てや日系人社会の発展方向にも影響を及ぼしました。

1952年、ウォルター・マッカラン法により、1924年の排日移民法が修正され、日系一世の帰化（アメリカ人としての市民権の取得）が可能となりました。1952年にはカリフォルニア州最高裁で違憲判決が出て、事実的に日系人を苦しめてきた排日土地法が撤廃されました。そして、1962年にはハワイ選出のダニエル・イノウエが日系人初の上院議員に選出され、1972年には、ジョージ・アリヨシが日系アメリカ人としてはじめてハワイ州知事に選出されるなど日系人の地位は徐々に向上していきました。

このように、太平洋戦争後、多くの日系人が急速に自己の生活を再建し、目覚ましい経済的、政治的成功を遂げるうち、アメリカ社会には日系人に対する新しいステレオタイプが生まれました。日系人は「模範的」マイノリティと呼ばれるようになったのです。

□補償運動期（1966年～）

戦後、日系人はどんな社会運動を展開したのでしょうか？

1960年代から1970年代にかけて盛り上がった公民権運動や黒人解放運動は、アメリカ人の意識を変え、その結果、新しい法律が数多く制定されました。アフリカ系アメリカ人は自分の主張を社会に訴えかけ、他の少数民族グループもそのような動きに加わるようになりました。日系人の強制収容に対する謝罪と損害賠償を求める運動は、戦後直後から開始されていましたが、このようなマイノリティ運動に刺激され、1970年代後半から急速に進展していきました。当初、多くの日系人は苦しかった過去を思い出したり、心の奥底に眠っている古傷に触られることにはあまり乗り気ではありませんでした。また国家

強制収容所の生活

ざらざら照りつける太陽は体中の水分を奪ってしまうのではないかと、ユキは思った。心臓にはしわがより、肺もひからびていくような気がした。頭はぼーっとしてまるで他人の体を借りているみたいだった。新しい部屋は、タランフォンの馬小屋よりは広かった。これはうれしかったが、殺風景さには変わりはない。三組の軍隊用簡易ベッドのほかには何もなかった。内側の壁には何もはってなく、壁や窓枠のすき間から砂ぼこりが遠慮なく入ってきた。（ヨシコ・ウチダ『トパーズへの旅』評論社、1975年、pp.142-143より）

第442連隊戦闘部隊

この第442連隊戦闘部隊は多くの死傷者を出しながらイタリア戦線で活躍しました。彼ら二世兵士が“Go for Broke”（当たって砕けろ！）を合言葉に戦場で見せた戦い振りは、日系人に対するアメリカ社会の認識を変えただけでなく、兵士たちは故郷に戻ると戦後日系人コミュニティ再建の原動力となったのです。



賠償をどのように勝ち取るかについての方法論や、それによって何を求めるかについても多様な考えが混在していました。

しかし、1981年には「戦時民間人転住・収容に関する委員会」による最初の公聴会が開かれ、その後全米10都市で同様の公聴会が開かれ550人が証言に立ちました。それらをもとに委員会は、第二次世界大戦期の日系人の強制収容は「人種的偏見」、「戦時の狂乱」、「政治指導の過ち」に基づくものであったと結論づけ、報告書を議会と大統領に提出しました。

そして1988年8月10日、強制収容に対する補償を規定した「市民的自由法」にレーガン大統領が署名し、アメリカ政府による謝罪文と一人2万ドルの補償金が、1990年10月から約8万人被強制収容者に渡されま

した。この長年の運動によって実現した日系アメリカ人への謝罪と補償により、日系人はアメリカへの信頼をとり戻したのです。

これは強制収容が単に日系人だけの問題ではなく、すべてのアメリカ人に関わる重大な問題であると認識されたことのあらわれでした。



二世ウィークパレード（ロサンゼルス、2006年8月）

□今日の日系人

日系アメリカ人の今は？ そしてこれからは？

日系人は、第二次世界大戦中にそれまで集中して居住していた西海岸から内陸部へと強制移動させられ、戦後は移民した直後と同様のゼロからの出発を余儀なくされました。しかし、犠牲をともなった努力によって急速に社会的・経済的地位を上昇させ、今日アメリカの主流に入り込んできています。教育水準や所得の高さではアメリカの全体の平均を上回り、職業面でも専門職に就く人が多く、「成功したマイノリティ」と称されることが多くなってきています。しかし、こうした成功神話は日系人が直面しているいろいろな問題を覆い隠すことにもなっています。例えば、日

系人家族の平均収入は共働きの家庭において、アメリカ人家庭の平均収入より高いのに昇進する機会が制限されていたり、年老いた日系人が必要な社会的サービスや医療福祉の対象から外されたりしたのです。

1980年の統計では、日系人の72%がアメリカ生まれであり、現在は、三世、四世、五世の世代になってきています。今日、日系人は日系コミュニティの中だけで生活することはなく、日本語を話す三世はほとんどおらず、日系三世の60%が日系人以外と結婚しています。

このように日本人がアメリカに移住してから100年余りの間に、他集団との様々な関わり合いをもち、彼らの自己・他者意識も大きく変容し、現代の日本人とは異なる「日系アメリカ人」としての世界観を築いています。一方、現在アジア系の中には、中国系や日系といった個別の意識よりも、自分は「アジア系アメリカ人である」という意識も徐々に育ってきています。

このように、かつてアングロ・サクソン系白人を中心に成り立っていたアメリカは、現在、多文化多民族が共存・共生するアメリカへと変化してきています。このような変化によって、これまでアメリカの歴史の中に埋もれてきた日系人の歴史的経験も、新しい視点から見えるようになってきているのです。

（森茂岳雄・中山京子）



日系人以外の参加も多いハワイの盆ダンス
（Soto Mission Betsuinにて、2005年7月）